

善徳

七三四一〇〇〇四

広島市南区宇品神田四一十一一八

善徳寺

電話 〇八二一五六一六〇二九

御礼



去る八月十八日の、前任職の葬儀には、たくさんの方に献花・焼香に足を運んで頂き、ありがとうございます。又、総代をはじめ、役員の方々には、酷暑の中、長時間お世話いただき、ありがとうございました。

コロナの感染が心配される中で、葬儀をどのように行うべきか、迷いましたが、会奉行の法明寺様を始め、大田葬祭さんや、総代さん方との相談の末に、親族の式後に、一般の方々に焼香していただくという形になりました。

コロナの中にもかかわらず門信徒の方々はもとより、各方面の有縁の方々にお別れしていただいて、前任職も嬉しく思ったのではないかと思います。

前任職は、お寺の生まれではありませんでした。縁があって僧侶を志し、善徳寺に入寺しました。以来、元宇品の墓地を掘げたり、手狭であった旧善徳寺を、現在の場所に移転、新築したりと、様々な事業に取り組んできました。

又、寺でクラシックやジャズのコンサートを開いたり、作品展を開いたり、当時としては斬新な行事を、企画・開催しました。

様々なボランティア活動にも取り組みました。例えば、広島で開催されたアジア大会を縁として、内戦後のカンボジアに、ヒロソマ

ハウスを立てるといっプロシエクトに、立ち上げの時から参加し、門信徒の方々の協力も得ながら、完成を迎えることができました。

又、北朝鮮の飢饉の際には人道的な立場から、食糧支援にも取り組みました。

様々な意見もある中、自分の信念を貫きながら進んで行った人生だと思えます。

五、六年前から、認知症のような症状が始め、なかなか診断がつかなかったのですが、進行性核上性麻痺という難病であるという診断がついたのが、四年近く前でした。

それから徐々に運動能力が衰えてゆき、八月十四日に往生の素懐を遂げました。闘病生活は不自由なことだったと思いますが、いつも穏やかで淡々とした晩年でした。

これからは、住職と坊守の二人になりましたが、精一杯務めてまいりますので、相変わらずよろしくお願ひいたします。

九月法座の中止のお知らせ

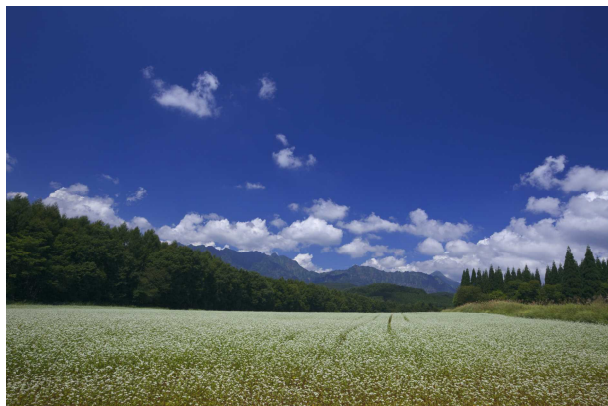
九月九日に予定しておりました彼岸会法要は、コロナ感染の予防のため、中止させていただきます。

三月からずっと法座が開けない状態で残念ですが、用心のため中止ということに致しました。

講師の、叶裕子先生には、十一月の報恩講に来ていただくことにしましたので、どうぞお参り下さい。

常朝事

現在中止しております。十月から再開する予定です。



秋季永代経法要

日時 十月二十日(火) 午後一時 風席 午後七時半夜席
 二十一日(水) 午前八時 朝席 午後一時 風席

講師 北九州市小倉南区 新道寺 山下信順先生

尚、十九日(月)午後一時より、仏具のお磨きをします。お手すきの方はお手伝い下さい。

生死を超えた世界

前任職が行信教校で学んだ時、非常に尊敬していた先生が、後に勸学になられた梯實圓先生でした。以下、先生の法話を抜粋でご紹介いたします。

みなさまご存じのように、お釈迦様は食中毒でお亡くなりになりました。

お釈迦様に帰依していた鍛冶屋の青年チュンダが、お釈迦様にお供養を捧げました。

「スーカラマツタヴァ」という料理で、今ではわかりませんが、大変な馳走だったといいますが、お釈迦様は、その料理にあたって激しい食中毒を起こされたのです。

「その時に恐ろしいことがあった。お師匠さまの体から血がほとばしり出た」というのですから血便が出たのでしよう。いわば赤痢のような激しい下痢によって、脱水症状を引き起こしておられ「水が飲みたい」とおっしゃっています。そして、少し良くなったなら

歩いてクシナガラ村はすぐまで行きます。そこでお釈迦様は力が尽きて、サーラの木の下に着を敷いてもらって、横になってお休みになります。その晩お亡くなりになるのですが、亡くなる前にお釈迦様が一番氣遣われたのは、チュンダのことでした。

「チュンダを責めてはいけない、またチュンダよ。あなたは決して悪いことをしたのではない。すばらしいお供養を私に捧げてくれたのだよ」

「私の生涯の中で、思い出深い、ありがたい供養が二つあった。一つは、スジャータという女性が私に捧げてくれた乳粥だった。スジャータの供養のおかげで苦行で疲れ果てた体から元氣を回復して、私は煩惱を断ち切って現生において涅槃の境地に至ることができた。そして今日あなたが捧げてくれた供養の力で、私は肉体の束縛からも解放されて、完全なやすらぎ、涅槃に入ることが出来る」

「あなたは私に完全な涅槃に入る機縁を与えてくれた者として、スジャータの供養と匹敵するすばらしい供養を与えてくれた。私は死ぬのではない。完全な涅槃に入るのだ」とおっしゃっています。

お釈迦様は、死をありがたいこととして、すーっと受け入れていきます。むなしい滅びとしての死ではないのです。だから「死」とは言わず、「涅槃」と言ったのです。

「開山は無上涅槃に入る」とおっしゃいますが、私たちもあのお釈迦様と一緒に無上涅槃に入らせてもらいます。お浄土に参らせていただくというのはいくらもありません。「わが国に生まれんとおもえん」仏さまの悟りの領域に生まれたいのだからと思いたいとおっしゃいます。

死におびえ、死のむなしさに打ちひしがれていく私に

「それはむなしい死ではないのだ。それこそ天地いっばいに広がっていく、悟りの目が開けるときののだ。だから決して心配しなくていいから、私にまかせて、私の国に生まれることができるのだと思いなさい」と、阿弥陀様はおっしゃってくださいなのです。この一言の中に生と死を越えた領域というものが私たちに告げられているのです。

この「生まれる」ということが、生と死を超えた領域を指し示すので、開山はこの生というの「無生の生（むしょうのしょう）」だとおっしゃっています。人間の考える生死を超えた世界です。人間のはからいを完全に超越した領域。そういう領域を我々に告げる、如来さまの智慧の言葉なのです。

敬 弔

お浄土に参られた方を謹んでお知らせ致します。

- 七月十二日寂 府中町桐蔭
- 中村キミ子様 行年九十五才
- 七月二十二日寂 廿日市市皆賀
- 是政 等様 行年八十四才
- 八月七日寂 御幸二丁目
- 相見 晃様 行年八十六才
- 九月一日寂 西二丁目
- 中村京子様 行年七十才

写真 乙井みどり



郵便番号 七三四一〇〇〇四
 広島市南区宇品神田四丁目十一番八 宗教法人 善徳寺
 振込 もみじ銀行宇品支店(普) 〇〇〇〇・〇〇〇〇〇〇〇三4
 むうちよ銀行 〇13330-0-546655

「善徳」年八回発行
 護持会員には毎回配布
 ホームページ「宇品善徳寺」